

前衛(アヴァンギャルド)の墓掘り人夫 フィリップ・ソレルスと前衛

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	16
ページ	75-92
発行年	2020-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001839/

[資料]

アヴァンギャルド
前衛の墓掘り人夫
——フィリップ・ソレルスと前衛——

小山 尚之*

(Accepted November 18, 2019)

Gravedigger of the Avant-Garde

——Philippe Sollers and the Avant-Garde——

Naoyuki KOYAMA

Abstract: This article is a translation into Japanese of « La mort des avant-gardes : Entretien de Mehdi Belhaj Kacem avec Phillippe Sollers » and gives a small comment about it. In this dialogue, Sollers elucidates avant-gardism of TEL QUEL, the difference from other avant-gardisms, the relation with Guy Debord and INTERNATIONAL SITUATIONIST, the transition from TEL QUEL to L'INFINI, etc.

Key words: Philippe Sollers, avant-garde, *TEL QUEL*, Guy Debord, *L'INFINI*

はじめに

本稿は二〇一九年春号の『ランフィニ』誌第一四四号に掲載された「^{アヴァンギャルド}前衛の死：メディ・ベラージ・カセムとフィリップ・ソレルスとの対談¹」を翻訳しそれにコメントを付したものである。この対談では『テル・ケル』の歴史や『ランフィニ』への移行が話題になっているが、筆者はフランスにおける雑誌の歴史あるいは前衛の歴史にほとんど通じていないことをあらかじめお断わりしておく。なお、この対談のフランス語がいつものソレルスの対談とは少し異質であることも指摘しておきたい。この対談には事後の推敲のような跡が見られず、対話の即興性がそのまま残されているようなところがある。たとえば言いどみが多かったり、言い落としのようなものがあったり、

文の途中で別の文が始まっていたり、長い挿入的発言があったり、「あれ」と言うだけで何を指しているか良く分からない箇所がある。それらについては筆者の裁量で補ったり注で補足したりした。この対談の注はすべて筆者によるものである。

メディ・ベラージ・カセムはウィキペディアの情報²によると、一九七三年パリ生まれのチュニジア系フランス人。小説、哲学的エッセイ、映画俳優など、多彩な活動をしている。ダンテの『新生』の翻訳家でもあるようだし、アルトーについてもエッセイがある。ソレルスとの親和性が窺える。この対談では彼がラカン理論の用語を駆使しているのが見られる。

アヴァンギャルド
前衛の死

メディ・ベラージ・カセム Mehdi Belhaj Kacem (以下 M.B.K)

¹ « La mort des avant-gardes : Entretien de Mehdi Belhaj Kacem avec Phillippe Sollers » dans *L'Infini*, n°144, Printemps 2019, pp.24-43.

² https://fr.wikipedia.org/wiki/Mehdi_Belhaj_Kacem.

と略す)：フィリップ・ソレルス、あなたは二十三年間のあいだ雑誌『テル・ケル』の編集長でした。疑いなく「^{アヴァンギャルド}前衛」(以下「前衛」と表記)と形容し得る本当に最後の重要な文学雑誌でしたが、この雑誌は当時「前衛的」と言われていたもっとも偉大な作家の何人か、たとえばピエール・ギュヨタ Pierre Guyotat、モーリス・ロッシュ Maurice Roche、ジャン＝ジャック・シュール Jean-Jacques Schule、それからあなた自身を世に出しました。しかし同時に、当時はまだ世に知られていなかった大学の研究者たち、たとえばジャック・デリダ Jacques Derrida、ロラン・バルト Roland Barthes、ジェラルド・ジュネット Gérard Genette といった人々も刊行しました。あなたはまたピエール・ブレーズ Pierre Boulez やジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard といった、上に挙げた作家や思想家とおなじく前衛の先頭を行く人々も出版されておられます。あなたは一九八三年にスィユ社を、というよりこの雑誌を離れ、あなたの本はガリマール社で出版されるようになりました。ガリマールであなたは『ランフィニ』を創刊します。この雑誌は様々な点で『テル・ケル』と一線を画すことになるでしょう。あなたの著作の道程において、この移行は、三百ページ近くある大河のようなモノログで句読点のない『楽園』から、比較的「古典的な」、描写的で心理学的な小説のエクリチュールに回帰する『女たち』への移行として現れています(私がこのように言うのにはいかなる侮蔑的なコノテーションもありませんし、言わば『女たち』の「形式」はある意味ですでに前衛時代の死亡通知を告げているその「内容」に呼応していることをここでははっきりさせておきます)。ところで、このような振る舞いは多くの人々から裏切りとして、折良い時期にもっと「^{メインストリーム}主流」寄りの精神のためになされたある種の「前衛」精神の裏切りとして解釈されています。私の目からすると、いずれにせよ問題は、雑誌『半透明』第六号の宣伝文句ともなっている、前衛の消滅という、もっとも「指標となる」事件のひとつに間違いなく関わっていると思われます。『テル・ケル』の終焉はあなたにおいてはあらゆる実験的なエクリチュールのほとんどの放棄を伴っているのですが、それは私の目には前衛の解体のもっとも人目を引く歴史的な徴候のひとつとなっています。『半透明』の件の号は人々がこの解体にかんして死体解剖を始めていることに何らかの寄与をしたいと思っています。

ところで、あなたが六十年代の初めにジャン＝エデルン・アリエ Jean-Edern Hallier と雑誌を始められた時、やがてそれはその世代の偉大な文学的な前衛雑誌となるわけですが、最初の数年は、この雑誌はそのようなものとして、つまり前衛の雑誌としてみずからを認識してはいません。モデルとなったのはむしろ二十世紀全体を通じて基準となったガリマール社の雑誌『ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ』でした。そしてあなたは今ここガリマール社にいて、三十年以上にわたって『ランフィニ』という雑誌と叢書の責任編集を行っています。ですからこれらすべてにはひとつの一貫性がある。しかし私はその手掛かりとなるものすべてを有しているわけではないのです。そこで我々はこのことについて話すためにここにいるわけです。

ですからまず初めにお聞きしたいことは次のことです。『テル・ケル』の「前衛」への転換点をあなたはどこに位置づけられるでしょうか？

フィリップ・ソレルス Philippe Sollers (以下 Ph.S. と略す)：(沈黙)。すぐにです。私の意図がそれ以前の分類に異議を唱えることにすぐになったのに応じてです。私の目にその分類はとても規範的でアカデミックに見えました。それを前衛の遺産(すでに遺産です)の色合いのもとで異議を唱える。そしてそれは、これは私がこれ以後ずっとやり続けることになることですが、二十世紀において、そしてまた古い時代から今に至るまでに起こった根本的なことからの真のカタログ、もっとよく言えば真の百科全書を作り直すためなのです。この問題においては時間にたいする知覚が重要です。じっさい我々は、注意深くありさえすれば、前衛が、というより「すべての」前衛が、時間にたいして「どのような」考え方を持っていたのかを知ることができます。それに対する答えは即座にお分かりでしょう。その結果あなたがおっしゃるように、昏睡状態が六十年代から始まり、完全な解体に至ります。私はこの解体が自分の行き先地であったことを認めようと思います。前衛の歴史を重層的に決定している時間の概念は、「ソビエト革命」によって流布された時間の概念と深く結びついています。

M.B.K：あなたは私の質問を先取りしています！

Ph.S. :これが問題の核心です。今でもこの問題は解決されていません。従って、時間に関する一貫した「錯誤」ゆえに無視され続けられるであろうこと、あるいは時間に関する考察の全体的な不足に比して言えば、この点から多くの結論を引き出すことができるでしょう。このことに関して、すでに重要なテキストが現れているのはお判りですね。『存在と時間』と呼ばれるものです。

そして『テル・ケル』の前衛性とは、文学の問題について（しかもこの問題はずっと同じであり続けるのですが）、哲学者たちに問うという形で彼らに働きかけることから成り立っていたのです。たとえばなぜ文学は哲学以上に思索するのか？問題はそれです。「文学」という語を「ポエジ」に置き換えてごらん下さい。するとあなたはある人物に行き当たります。彼は、たとえその生涯の最後においてその呼称を受け入れなかったとしても、「哲学者として」あなたがたにやはり基本的な何かを、『言葉への途上』、『ヘルダーリンの詩の解明』と呼ばれているものを伝えたのです。その人物の名はマルティン・ハイデガー Martin Heidegger です。第一級の、こんにちでもまだ決定的に呪われた人です。では、すでに『ドラマ』（一九六五年）から始まり、そして一九六五年当時のダンテ Dante に関する重要なテキストを収めている『エクリチュールと限界の体験』（一九七一年）をもって、何をそれは前衛でなそうとしているのか？

そうです、前衛、それはダンテなのですよ、あの当時は。その具体的な証拠は、ダンテの最初の翻訳がジャクリーヌ・リセ Jacqueline Risset³によってなされているということです。彼女は数年前に亡くなりましたが、その翻訳は都合よく二言語を併用するやりかたでプレイヤー版の恐ろしい翻訳に取って代わっています。どういう点でダンテは前衛なのだろうか？問いはこんな風を立てるべきなのです。ダンテが云々というのでなく……。

M.B.K. :でもやはりそれは大きすぎる問いですよ。バッハ Bach は前衛ではなかったのか？（笑い）。あるいはソフォクレス Sophocle は……。

Ph.S. :進行中ではあったがやがて戦略となるであろうものが構築され、垣間見られるようになるのはあのときからです。つまり『エクリチュールと限界の体験』、そのあと『例外の理論』（一九八六年）で構成されることになる戦略です。その戦略が言わんとしているのは、まったく特殊なものか、すなわち古い時代からこんにちまで至る記念碑的な単独性です。我々は様々な単独性を強調し、どんなことであれ「一緒にいること」を避けているのです。前衛の誤り、というか愚かさは、「一緒にいること」をなんとしてでも強制しようとしたところにあります。

M.B.K. :それでもバタイユ Bataille は例外なんじゃないですか……。

Ph.S. :ああ、そうですね。あのとき、バタイユがですね、メディ・ペラージ・カセムさん、『テル・ケル』に原稿を持ってきているんですよ。なぜなら彼はどこに行けばよいのか分からなかったからです。彼は、まさにあなたがここに座っていらっしゃるように、きわめて堂々とした沈黙のなかで座っている。疑いなく「場と表現」を保持していたのは彼でした。それで、その原稿のタイトルは「非・知に関する講演」というもので、『テル・ケル』の第十号に出ました。お分かりになりますよね、粘り強く単独性を選択するために必要な信念というもの。

いずれにせよあなたに注意を促しておきたいのは、前衛とは『テル・ケル』的な意味での前衛であって、『テル・ケル』的な意味でのみの前衛なのです。なぜなら他のすべては消えているのですからね。『テル・ケル』は存在し続けている。なぜ存在し続けているのかよく分かりませんが、でもまあ事典がその証拠となっています。これをその文脈のなかに置き直してみると、問題となるのは極端に複雑な遊びなのです。なぜなら矛盾しているように見え得る、あるいは対立しているように見え得る、〔あるいは前代未聞のやり方でも弁証法化し得ないもののように見え得る〕さまざまな断片を動かすことが問題だからです。

³ ジャクリーヌ・リセ（一九三六年～二〇一四年）。ダンテの翻訳家。『テル・ケル』の編集委員を務めた。

たとえばアントナン・アルト Antonin Artaud を置いてみます。するとそれがとても遠くにまでわれわれを連れ出すことになるのはあなたもご存知ですよね。私自身、このおかげで裁判所まで連れていかれました。冗談じゃないですよ。そこで私はアルトのヴィウ・コロンビエ座の講演を出版したかどで有罪判決を受けました。これらすべてはなにを理解することに導くのか……。このとき「だれが」前衛として出現するでしょう？

M.B.K. : さまざまな単独性です。

Ph.S. : ですが、とりわけジェームズ・ジョイス氏 James Joyce なのです。すると、分かりますよね、あなたはダンテとジョイスを結びつけることができ、バタイユとアルトを結びつけることができるのです……。たとえば「だれが」絵画における前衛なのか？ もちろんピカソ Picasso です！ デュシャン Duchamp やその手合いの背後に身を隠すにはおよばない。前衛が「有罪」なのは……を支持したことで……。

M.B.K. : では、あなたは有罪なのですか？

Ph.S. : いいえ！ なぜなら私は前衛の純粋な「ドクサ」を支持したことは一度もないからです。ところで「現代アート」と呼ばれているものは前衛の腐ったもの、つまり芸術ですよ。マーケティングの手に握られた文学のようなものです。

M.B.K. : 時間の問題については、この対談の最後で、とても豊かであると同時に明確なあるものに言及したいと思っています。

やはり私は自分の質問を繰り返します。というのはあなたはこの質問に答えていないからです。『テル・ケル』は当初、前衛雑誌として現れてはいないのです。やはり転換点がある……。我々は時間について話しているのですから……。

Ph.S. : これはまったく「古典的な」ものとして現れた雑誌です。序文はフランシス・ポンジュ Francis Ponge と私とでリュクサンブール公園で練り上げられます。ポンジュは前衛作家なのか？ 彼は前衛からはそうと認められていません。それで

も結局、サルトル Sartre のようなスケールの大きい哲学者によって前衛であると承認されました。ですから問題はすぐに、哲学者たちが文学について語るそのやり方を知ること、となりません。彼らは文学の内情に通じているのか？ 本当に？ いかにして？ どの程度まで？ 等々。これが『テル・ケル』のつねに変わらない、しかし注目されることのほとんどない態度なのです。この観点から見た場合の実例は、申し訳ありませんけれど、とんでもないものです。簡潔に言います。『テル・ケル』のスリジーのコロックに最初に来て、その十五号から論文を発表し始めるのが、当時非常に重要な二冊の本『狂気の歴史』と『臨床医学の誕生』を書いたミシェル・フーコー Michel Foucault なのです。そのほかの哲学者たちもすぐそこに来るようになりますが、なんといってもデリダ Derrida です。

それから私の特性は、いつでも、とりわけ前衛の「アカデミズム」となるものに対する一種の火のついた導火線のようなものですから……要するにラカン Lacan です。ラカンはすぐに大きな次元を獲得します……。私は毎週火曜日ラカンのセミナーを聞きに行ったものです。それは並外れたものでした。

M.B.K. : その場合、あなたがお話になっているのは非・大学の研究者です。あなたが「哲学者」とおっしゃるとき、あなたは大学の研究者のことをお考えになっている。このことは『テル・ケル』の道程とあなたの道程双方において重要性を有しています。

Ph.S. : 大学ね……。前衛の歴史で問題なのは、もう一度言いますが、あれらすべては「ソビエト革命」からくる巨大な幻想と欺瞞性に支えられていたという点です。

M.B.K. : 私が強調したかったのもその点です。前衛の問題の核心、それはやはり芸術と政治を結合させる結び目にあります。

Ph.S. : はい。まったくその通りです。

M.B.K. : 前衛というのはレーニン Lenin からきている概念です。ダダからきているものではありません。

Ph.S. : この関連から見ると一九七一年六月運動が非常に重要です。なぜでしょう？ なぜなら、特に大学で、いずれにせよ前衛の、ということはすなわち共産党の、あの「幻想」を引き合いに出していた人々すべてが、最終的には『テル・ケル』をわが家だと感じるようになってしまっていたからです。

M.B.K. : それこそ私があなたにお聞きしたいと思っていた問いです。これは、なんとというか、大学との夫婦喧嘩ですよ。ひとたびあなたが大学の研究者たちとの関係をほとんど断ち切られると、ジョイス問題が非常に重要な輪郭を帯びてきます……あなたがこの著者にたいして『テル・ケル』の終わりごろの番号で捧げているテキストは、この主題に関するかつて読まれたもののうちでも最良のテキストです……、それと同時にジョイス問題は、私の意見では^{サンブトム}徴候の役割をになっている。ラカンが言っていた「^{サントム}sinthome」の役割すら持っています（^{サントム}sinthomeと精神病との関係は^{サンブトム}徴候と神経症の関係に等しいのですから）。
従って『テル・ケル』の様々な単独性のうちの一つは、もしこう表現することができるとすれば、「普通の」前衛雑誌と比べてみると、多くの大学の研究者たちを出版しているという点にあります。そして彼ら自身、大学でのある種の前衛でもありません……。

Ph.S. : もちろんそうです。しかしどうして大学がこれほど私に恨みを抱いているとあなたは思われますか？ 彼らはわが家にいると信じていたのです！ 大学は、六十八年五月以降かつてないほど、共産主義と呼ばれていたもの、もしお望みならまさに前衛・左翼となり得たものに大量に売られた状態にあったのです。これらすべてをゲッターに閉じ込めるという天才的な思いつきがありました。ヴァンセンヌという名前のゲッターです。こうしたすべてがそこで腐るのを人々は待ちさえすればよかったのです。裏で操っていたのは誰だったのでしょうか？ シクスー夫人 Madame Cixous、デリダ氏だったのです。ですから我々は仲違いをしました。

M.B.K. : 一九七二年は毛沢東主義への「転向」の年ですね。あなたが大学との関係を断つのはこの時です。変ですね。まるで私たちは論争しているみたいですが……。

Ph.S. : 七二年ではありません。七一年です。日付けは正確でなければなりません。一九七一年六月運動は、それなりに意義のある、また私の意見では前衛的な、数部の小さな分冊でなされました。とは言っても、前衛のアカデミックな歴史（これはこれで意義があります）の意味における前衛ではありませんが。たとえばマルク・ダシー Marc Dachy が扱っているようなものです。彼を出版したことはまた別の大きな誇りです。

M.B.K. : それではやや堅苦しいジャーナリスティックな質問を続けます。あなたは重要な点に言及なさいました。すなわち前衛へのあの転換点ですが、何人かの人々はそれを一九六六年以降と位置付けています。つまり『テル・ケル』のベトナム戦争反対への政治参加以後ですね。その二年後、わたしの思い違いでなければ、フランス共産党との対話があります。四年後、フランス共産党との断絶と引き換えに毛沢東主義への参加があります。ここで我々は、私の意見では前衛のすべての歴史における盲点であるものに触れます。すなわち前衛の極端な活力と同時にその早すぎる死を説明する結び目です。二十世紀において前衛のイデオロギーはとてつもないガソリンでした。このことを前衛から取り除くことはやはりできません。これは十九世紀におけるロマン主義のようなものです。ヘルダーリン Hölderlin もボードレール Baudelaire もロマン主義者ではありませんが、十九世紀全体を横断したロマン主義という大きなうねりがなければヘルダーリンでもボードレールでもなかったでしょう。

Ph.S. : その点で強調しなければならない事実は、もっとも重要な事件はやはりシュルレアリスムだということです。

M.B.K. : それでもダダがありますが。

Ph.S. : ええ。ダダイストたちは「私はダダ運動をやった」と言っていました。しかし思い出すに値するのはアラゴン Aragon の小さな詩ぐらいですね……。私のアンドレ・ブルトン André Breton にたいする忠節は終始一貫変わっておりません。私がこれまでずっと言ってきたことですが、私にこの上もないほどの

影響をおよぼした献辞、それはブルトンが一九六二年に『シュルレアリスム宣言』の再版本にしたための献辞であって、「フィリップ・ソレルスへ、妖精たちに愛される者」というものです。

M.B.K.: では私の質問を締めくくります。二十世紀の前衛の活力と同時にその突然の死を説明すること。私が精神的外傷を、すなわちあまりに突然なので誰もそのことを記憶にとどめようとしないうちに死を話題にするのはそのためです。ラカンの用語で言うとうと都合がいいのですが、それは抑圧 *refoulement* に関わるのではなく、排除 *forclusion* に関わることであったのです。人々は前衛を、イデオロギーとしての前衛主義を排除したのです。

このことを説明する結び目、それは芸術と政治、今の場合ですと文学と政治を一つにする結び目です。私は同じことを繰り返していますが、この点が決定的だからです。しかしやはり前衛という概念を創造したのはレーニンであって、ダダではなかった。

Ph.S.: それでもなおレーニンにおいて認めなければならないのは、ヘーゲル *Hegel* の弁証法に関する彼のノートです。すなわち私が哲学に関心を持つ時期にですね、(どんなときでも私の心をとらえて離さないのはなによりも哲学なのですから。いや本当に。そういうことです) つまり私が非常に若いころ、フッサール *Husserl* のおかげで読むことになるのがまずヘーゲルということになります。『運動』⁴ という本は全編ヘーゲルについて具体的に語っています。そしてマルクス *Marx* の悲惨な過ちを批判しています。その過ちはソビエトの代理人コジェーブ *Kojève* によって引き継がれました。なぜなら「弁証法を再び足で立たせる」というのはとても美しい表現ですが、しかしその時にはもう弁証法に頭はないのですから、等々と批判しています。それから、もちろんニーチェ *Nietzsche* です、彼は圧倒的な衝撃です……。

M.B.K.: ニーチェは『テル・ケル』の最初の号からすでにペディメントとして引用されています……。

Ph.S.: もちろん。そしてハイデガーです。すぐに、『テル・ケル』の初期からです。誰もハイデガーの『ニーチェ』二巻を読んでいませんでした。そのフランス語の訳者クロソウスキー *Klossowski* ですら読んでいなかったのです。ですからハイデガーの抑圧、無理解は異常なものです。それは、たえず誇張される彼の政治的妥協の物語とともに、こんにちでも続いています。最近私は……。それでですね、前衛の、もっとも重要な作家、それは実際セリーヌ *Céline* なのです！ このルイ＝フェルディナン・デトゥーシュ *Louis-Ferdinand Destouches* ほど言語をかき混ぜた「前衛」の作家が他にいるでしょうか？

M.B.K.: はい、それらすべては不可分な全体をなしています。あなたは大学との断絶の後、ジョイスとセリーヌを「引っ張り出して」くる。そして毛沢東主義にたいして距離をとるようになり……。

Ph.S.: それから私はブルースト *Proust* であなたに前衛のフランドールを踊ってみせましょう。ブルーストは前衛から無視され、完全にボイコットされていました。間違いです。間違い、間違い。

M.B.K.: ええ、でもあなたは『テル・ケル』の頃はブルーストについて語っていませんでしたよ。

Ph.S.: 語っていません。時機を待っていたのです……。どんな戦略がじっさいに作動するのかを把握するには、より遠くから物事をとらえ直さなければなりません。今となっては、私のいる地点から見ると、あなたはまるで私の生き字引のような人で(笑い)……。映画でも同様で、私にとって偉大で決定的な前衛、それはヒッチコック *Hitchcock* です。

あなたは「毛沢東主義」という、中国の小さな介入のことを加えていらっしゃる。おお、なんというスキャンダル！ まだそのことは話題になっていますね。では、何がその後につながる

⁴ ソレルスの小説。Philippe Sollers, *Mouvement*, Editions Gallimard, 2016.

か？ あれです。あれを私は北京から持ち帰ったのですよ。あれはとても美しい詩なのです⁵。私は中国の革命に興味があるのです。もし中国がなければ、毛沢東主義ありません。毛沢東主義者だった哲学者もいますよ、誰だか名前は挙げませんが（笑い）。彼らはこの問題の中国的な要素を考慮に入れていません。これが中国で起きていることに気づいていないのです。我々が一九七四年にジュリア・クリステヴァ Julia Kristeva やバルトと一緒に中国に行ったとき、中国人の数は七億人ですが、こんにちではその倍になっています。二〇三〇年には中国の国内総生産は世界で第一位となっているでしょう。ですから何が言いたいのかというと、前衛は何かが到来するのを見なかったということです。そうではなく無からの無を見たのです。

もちろん前衛は実在し、お望みなら様々なセクトも存在し、歴史的なヴィジョンも持っています。しかし基本的な哲学思想は持っていません。問題はそれです。それからまた、他のスキヤンダルもあります。私は本当にこうしたジャンルの事柄のスペシャリストですね。そのスキヤンダルとはやはり、ちょうどポーランド問題のときの、ヨハネ＝パウロ二世^{フォーモヴァー}「永遠に」でした。要するにここでも私は一枚噛んでいたのですよ。私は結局彼に、『神曲』に関する私の小さな本を——なんと粘り強いことかお判りいただけるでしょう——献呈したのです。あの超越の崇高な可能性そのものである『神曲』に関する本を法王以外の誰に献呈したいと思いませんか？ 私は法王に献呈しています。そのときの会見の写真もあります。この写真がスキヤンダルを引き起こしました。あの折、私は祝福されているのです。しかも聖人に祝福されているのです。というのも彼は列聖されたのですから。私は毎日その恩恵を感じています。私はですね、これも実際「前衛」の仕事の一つだとあなたに言っておきます。その通り。ええ、そうですとも（笑い）。

M.B.K.：問題はですね、あなたの答えすべてが、まるで私の質問を予知しているかのように、私の質問を先に含んでしまっているということです。ですが、それでも私は、もしかすると

あなたを不意打ちするかもしれない質問につないでいこうと思います。あなたはやはりチェスの名手ですね（笑い）。さて、ありとあらゆる前衛の活力と早すぎる断末魔を説明する例の芸術と政治の結び目についてです。『テル・ケル』とほとんど同じ頃、一九五七年から一九七二年のあいだ、別の前衛雑誌が存在していました。それはのちに大変な評判となるでしょう。しかも様々な勢力のなかで、非常に内接的な一つのグループ名と同じ名前の雑誌です。『アンテルナショナル・シチュアシヨニスト』（以下『I.S.』と表記）といいます。これは、なんと言ったらいいのでしょうか、より「純粹で厳しい」、いずれにせよ『テル・ケル』のそれとは極端に違う構想を持つことになるでしょう。ここではその差異を要約しないでおきます。それは我々をあまりに遠くへ運び去るでしょう。私はこの質問をあなたにぶつけてみます。というのもあなたは、シチュアシヨニズムの「法王」とあだ名されたギー・ドゥボール Guy Debord という名前の人物と極めて長く複雑な関係をもつことになるのですから。

Ph.S.：これはとても重要です。まず第一の考察。『I.S.』もドゥボール自身も、「絵画」について真に根本的なほんのわずかな言葉すら発することができなかったということです。

M.B.K.：それが前衛というものです（笑い）。

Ph.S.：そして第二にですね、ドゥボールのことを私は好きだったのです、彼の意に反してですが。というのも……。

M.B.K.：彼はあなたにつらく当たっていましたね……。

Ph.S.：彼は私のものを読んでいなかった。私は彼のものを読んでいる。注意深く読んでいるのです。そういうことなんです。ドゥボール自身は、『スペクタクルの社会』のイタリア語版を再版する際でもプロレタリアートという概念にお忠実なままです。これは驚くべきことです。プロレタリアートという

⁵ ソレルスが中国から持ち帰った漢詩の掛け軸のことだと思われる。ソレルスのガリマール社のオフィスに掛けられており、小説や対談でもよく言及されている。

概念だけでなく、そのもの自体が消滅している時代以降はですね。「どのような時間の考え方で？」というつねに変わらぬ争点をあなたが位置付けてくださっても結構ですよ。「共産主義の仮説」があると想定することによって……。ドゥボールの人格とエネルギーにたいする私の感嘆の念がありますが、最初はかれの文体にたいする感嘆だったのです。しかもその文体たるや……超・古典的なのです！ 前衛主義とはずいぶんかけ離れたもの……。

M.B.K.: あなたは私があなたに質問しようとあらかじめ考えていなかった根本的な問いを想起させます。思春期以降の私の思想形成において『I.S.』と『テル・ケル』という二つはとても重要でした。後者の雑誌の書き手たちが私にもたらしたものと、シチュアシオニストたちが私にもたらしたものとの間には緊張があります。一方には言語の、当時あなたが「テキストの」とおっしゃっていた驚異的な創意工夫があり、それを『テル・ケル』の書き手たちは示していたのですが、しかしエクリチュールの外で特に物議をかもしようなことは何もせずです。そして他方にはシチュアシオニストたちの奔放な、恐ろしいぐらい有効な「行動主義」があります。しかし彼らはまさに極端に古典的な言語で書いていたのですね。いま、私は三十をちょっと超えた歳ですが、しかし私にとってこの二つの間の緊張はざっと根源的なものです。この点について一言触れていただきたいと思うのですが。

Ph.S.: 『テル・ケル』の物議をかもした行為は、旧・ソ連とフランス共産党を最大限に困惑させることを目指した中国支持、法王支持の立場をとったことでした。そのことはいまだに話題になっていますよ。『楽園』を読み解くすべがおありならすべてが明らかになります。「シチュアシオニスト的な」ゲリラ・スタイルは素晴らしかった。しかしドゥボールが全部書いていたのです。彼は私のことに関しては思い違いをしていました。彼が「スペクタクル」に毒されていた証拠です。というのは彼は、私がスペクタクルの操り人形だと思っていたのですが、一方で私は「同時に」まったく別のことをしていたのですから。彼は、自身のエネルギーの力だけで、自分の後ろには亡霊のような軍隊がついているのだぞと信じさせるのに成功した偉大な將軍で

した。見事な日常の芸当です。彼の最後にはとても心を揺すぶられました。偉大なる挫折です。

M.B.K.: 我々はレーニンの話をしていましたが……。前衛とはなによりもまず軍隊の概念ですよ。

Ph.S.: そうです。私はむしろ特別な枢機卿です（笑い）……。ドゥボールは偉大な將軍でした。彼はオーヴェルニュという陰気な場所で一人で包囲されて苦しんでいました。それで彼はけりをつけさえすればいいのだと悟った、というわけです。

この種の振る舞い、「忍従する」振る舞いでうんざりするのは、まさに我々は超・ロマン主義的なスタイルに留まっているということです。

M.B.K.: ええ。もちろん。

Ph.S.: そして再度言いますが、ドゥボールの真実をもっともよく表明している映画は、というのもこの映画で彼の「声」を聞くことができるからですが、まごうことなく『われわれは夜に彷徨い歩こう、そしてすべてが火で焼き尽くされんことを』です。彼の声は少しメランコリックです……。メランコリー、メランコリー……。in girum……。我々はダンテの「地獄篇」第十三歌にいるのです！

M.B.K.: ヴェネツィアでは……。

Ph.S.: ええ。でも白黒のヴェネツィアです！ 決してカラーののではない（笑い）……。注意、注意……。それぞれの細部が重要だ……。ですから我々は輪になってぐるぐる回り、炎に焼き尽くされているのです。同意します。こう言ってよければ、

この回文⁶もとても美しいですね。でも結局我々はむしろ地獄にいるのです。

ダンテと言えば、面白いですよ、ベケット Beckett のような人物は煉獄より先へは行きません。ドゥボールは地獄で……英雄の地獄で見つかる！ まあ、馬鹿なことを言うべきではない！ 私自身は樂園に取り組んでいます、しかし……。

M.B.K.：その樂園の買い手がいない。

Ph.S.：誰もいません。我々は、それぞれが混じり合っている、音、出現、姿かたち、顔といった多くのことに囲まれながら、高揚した孤独のなかにいるのです。そのことに私は非常に早くから気づいていました。そしてこう独り言ちました。前衛、それはダンテだ！ 私はこの誓いを実行したのです。それはあらゆる人々を、その無知ゆえに、神学上の無知、端的に言えばたんなる無知ゆえに、完全に厭な気持ちにさせるであろうような何かだったのです。

M.B.K.：話しているうちに考えが浮かんだけれども、これはたとえばあなたとギュヨタの関係をなにか説明していませんか？ ギュヨタは現代のダンテではないでしょうか？ しかもただ地獄だけのダンテでは？

Ph.S.：しかし……『エデン、エデン、エデン』ですよ！

M.B.K.：(笑い)。はい、はい、確かに。

Ph.S.：なぜこのエデンという語を三回繰り返すのだろう？ (笑い)。ギュヨタは考え得る限りの支持を『テル・ケル』に出しました。我々は友人のままです。それにこのことはつねに単純なことではありません。『悲慘の嬉々とした動物たち』、あるいはこの類の他のもの以上に『昏睡』がありますし、最近ではとても素晴らしい『愚劣』があります。しかし結局ここでも

また非常にロマン主義的な地平と関りがあるのです。

M.B.K.：前衛はロマン主義の娘です。

Ph.S.：前衛はそのすべての立役者たちとその「女性との」恋愛沙汰とともに篩にかけられるべきでしょうね。この問題についてとても早くから非常に効率よく強調してきたのが私の特殊性だと思います。なぜならこのような観点から見ると、おのこの「ケース」で、動き、何物かを露わにする、何かがあるからです。アラゴンのことは語らないでおきましょう。ブルトンはひとりの女と出会い、狂ったように恋に落ち、すぐに彼女と結婚しなければならなかった、等々。シュルレアリストたちには有名な「性欲に関するアンケート」がありますよね……いずれにせよ珍妙なものです。アルトーはパスしておきます。くどくど言っても無駄です。これらすべての性的な貧困さやピューリタニズムはやはり信じがたいものです。

私の仮説のひとつは、問題はボードレールだ、ということです。なぜ彼は、前衛主義の、今風に言うところ「ハード・ディスク」からこれほどまでに消えてしまっているのか？ 『悪の華』、これはやはり何物かです。たとえば、どうしてこの題名なのでしょう？

M.B.K.：私はただただ仕事として倦まずたゆまず質問をするだけです。

Ph.S.：そしてそこから、私はサド Sade に関する、また彼が至高存在について書いていることに関する、非常に深い耳 *une oreille très profonde* を設定してみようと思うのです。要するに、サドについての全く新しい、歴史的に見ても新しい何かを、いかにして考え、書くかということです。なにしろサドに関する視点が少しは動いたのですからね。この件に関して私は「具体的な」前衛活動を持てたことを誇りに思っています。私はプレイアード版のサドの校訂版の責任者だったのです。というのは

⁶ ドゥボールの当該の映画のタイトルはラテン語で *In Girum imus nocte et consumimur igni* であり、前から読んでも後ろから読んでも同じ回文となっている。

アントワーヌ・ガリマール Antoine Gallimard にサドを持ちかけたのは私なのですから。プレイアード版でしかも「インディア」ペーパーでサドを出版する、それは……（笑い）。

これだけではありません。やはりロートレアモン Lautréamont が決定的です。『テル・ケル』の重要な詩人マルスラン・ブレネ Marcelin Pleynet の本『彼自身によるロートレアモン』が再版されました。この本が公になるのは一九六七年です。それはちょうどアラゴンが少し目を覚ます時で、なにしろ彼は考察を……ブルトンと一緒に『ロートレアモンと我々』を書いていたのですから。「ロートレアモンと我々」で我々というのは、ヴァル・ド・グラース病院でのアラゴンとブルトンです。彼らはパリの爆撃のあいだ狂人たちに囲まれながら声を限りにロートレアモンを交互に読んでいたのです。というわけで、あなたをご存知かな、今日か昨日のことでしたけれど、フレーヌにいる精神医学の専門家、精神科医——女性です——の方がですね、この方「^{シリアル・キラーズ}連続殺人犯」というもっとも冷酷な犯罪者たちとこの上なく困難なコンタクトを持ち続けている人なのですが、彼女が言っていることをあなたは読みましたか？ 彼女にとって偉大な本、それは『マルドロールの歌』なのです！

M.B.K.：ええ、興味深いことです。私はほとんど新聞を読まないのですが、『ル・モンド』紙のあの対談は見落としませんでした。彼女の語るすべてが非常に面白いです。感嘆すべき女性です。

Ph.S.：彼女は分析に十五年携わったそうですが、ラカンもそう遠くはなかったと推論できます。お分かりですよ。ですからこれらすべてを注意深く見守る必要があります。これこそ私が了解している意味での前衛なのです。すなわち人が知っていると信じているものの中には常に新しいものがあるという事実を見守ることなのです。そしてその新しいものを人は知らないのです。

そこからあなたが、もはや誰も何も読まず、みな恍惚とした無知のなかに陥っているという結論に達するとすれば、私が結局のところ何が言いたいのか非常に良く分かるはずですよ。

M.B.K.：いいでしょう。とても良い……。先に私が聞いたか

った問題は、『テル・ケル』とシチュアシオニストたちのあいだの差異に関わるものですが、それでも両者には、大学にたいする好戦的な敵意という徴候がまさにあります。同時に私が言いたかったのは、あなたが「哲学者」とおっしゃるとき、それは大学の教授のことを話題にしているのだということです。もちろん在野の著述家もいます。キルケゴール Kierkegaard、ショーペンハウアー Schopenhauer、ニーチェ Nietzsche、バタイユ、彼らは一流の著述家です。彼らはみな大学人と対になっています。

ですので『テル・ケル』と大学を結びつけたあの絆にやはり戻りたいと思います。大学とのどんな接触も徹底的に避けたシチュアシオニストたちとの差異をあらゆる徴候としてです。しかしシチュアシオニストたちがストラスブールの大学でやったような「ダダイスト的な」スキヤンダル、それはやがて六十八年五月に到達するでしょうが、そういったものを引き起こす場合は別としてです。

もちろん、『テル・ケル』の方はどうかといえば、先回りをして言えば、「フレンチ・セオリー」と呼ばれているものすべてはとても重要なものでしたし、哲学の歴史において極めて稀な瞬間を構成していました。事実フーコー、デリダ、ジュネット、クリステヴァ Kristeva らが話題になります（『テル・ケル』が出版した人物だけを語るとすればですね）……。しかし結局、大学の研究者たちをその内奥に包含した前衛集団という歴史的な実例は他に一切ないのです。なにしろ前衛の歴史においてこの点は非常に例外的ですので、これは強調され、おそらくは説明されるに充分値するのでは……。

Ph.S.：いや本当は問題はとても単純なのです。これからそれを論じてみましょう……（沈黙）。階級闘争によって（笑い）。大学の研究者の圧倒的多数は中産階級出身で、左翼のプチ・ブルジョワの教員の子供であることが多いのです。彼らは私の疑いようのないブルジョワ出自に由来するゆとりを許さないのですよ、メディ。それが問題なのです。ほかに問題はありません。ですから私は次のことを絶えず人々に想起させざるを得ないほどののです。つまり私は、モーリヤックとアラゴンに称賛された私の最初の本で人生の第一歩を踏み出したのではない。ポルドーの郊外で変わらぬ処世術と魅力のなかで生きていたのだ、

とね。私は、私が文学界にデビューするやいなや引き起こし、以来永続している、階級にたいする憎しみを免れるために、ボルドーから定期的に自分の全エネルギーを汲み取ってきているのです。以上のようなことは前衛の誰もあなたに言わないでしょう。

ドゥボールのことが気になったのは確かです。なぜなら非常に早い時期に彼が破産したのは本当だからです。しかし彼はプロレタリア出身ではない。その反対です。ですからプロレタリアの生成と自分をつなぎとめようとする彼のあのやり方は私には常に、なんというか……非常に奇妙なものに思えました。

というわけで教員というのは決定的に反動的なプチ・ブルジョワ、つまり左翼の人間なのです（笑い）。

M.B.K.：いいでしょう。ひとつ質問をしようと思っていましたが、それはほとんど質問ではないというか、ひとつの指摘のようなもの……またもや非常にラカ的なものです。すなわちどうして哲学と文学のあいだはかくもうまく機能しないのか。つまり本当に……人生と同じで、あなたがよくご存じのように（笑い）、愛の物語があるわけです。しかしそれはたいていの場合全然うまくいかない。しかし時にはそれでも非常にうまく機能することがある。見事なまでに、と言えるほど。やはり楽園はこの方面にむかって探すべきなのでしょう。しかし哲学と文学がどちらが女でどちらが男かを決定しないで構成するであろうカップルは、絶対にうまくいかないような様子をしています。

Ph.S.：うまくいきすぎるしかないでしょう！（笑い）。しかし、ただひとつの意味においてです。それは権力の問題です。そうした理由からですね、メディ、私はとても早くから、しかもすぐに気がついていたのです、哲学者たちがどのようにして文学と折り合っているのかを見るためには彼らの耳を引っ張りに（笑い）いかなければならない、とね。

いいですか、そこで私は、とても、とても古典的な……戦闘というか、強烈なゲリラ戦を展開したのです。すると「私の」要望に応じて、彼らはみなこの点についてやはり弁明に来たのです。忘れないでいただきたいのは、『散種』というタイトルのデリダの本が一冊あり、それは世界中の大学で研究されていますけれども、そこで問題となっているのは『数』であって……。

M.B.K.：ついでに言うておくと、それはあなたの本のなかでも私の大好きな一冊です。

Ph.S.：……それは翻訳されていないのです。英語に訳されていないのですよ。とすると、どうやって翻訳されていない本についての注釈を読むことなんてできるのでしょうか？ というわけで、これは、ベラージ・カセムさん、「フランス語」の問題なのです。フランス語で書かれたもののフランス語の問題です。あなたがお好きな人なら誰でもいいのですが、たとえば私の同郷人のモンテーニュを介してサドやボードレールにいたるまで継起する、天才的な表現を有するフランス語というこの「驚異」と、前衛と想定されたものとは、非常に仲が悪いという印象を、突然、私が持ち始めるのはいつなのか？ このことは、私に非常に乱暴な問いを課すのです。ただ唯一の人というのは……ブルトンはフランス語と何の問題もありません。彼は見事なフランス語を書いています。アラゴンは、あの読み難い『コミュニスト』を別にすれば、『聖週間』でなんとか窮地を切り抜けました。彼は一九五八年にあのフランス語に戻ったのです。ちょうど私に才能があることを発見するときです。その才能を持ち続けるよう彼なら望んでいることでしょう。ドゥボールもフランス語は見事です。しかし彼はすでにフランス語を、正当な理由があつて、「死んだ」言語の一つの可能性とみなしており、それをできる限り「厳密に」書けるようにならなければならないと考えています。ですからまあ結構なことです。

さて、フランス語です。ボードレールがいます。ランボーがいます。マラルメがいます。やはりなんといってもロートレアモンがいます……。ところでいいですか、他所には大したものはないですよ。本当に目が見えず耳も聞こえない必要がある、フランス語が何に値するのかを見ないには……。

M.B.K.：いろいろな配慮に値する。

Ph.S.：フランス語はこの言語のために自己を「犠牲にする」ことに値するのです。これを私はやってきたのです。

M.B.K.：月並みな質問をさせていただきます。『テル・ケル』から『ランフィニ』への「運命的な」（ある種の人に依ればですが）移行についてです。何があなたをそう決心させたのですか？ どのようにしてそれは行われたのですか？ 驚くべきだと私が思うのは、結局誰もあなたにこの質問を一度もしたことがないということです！ いずれにせよ私の知る限りでは、明確な時期を引き合いに出すことができますか？

Ph.S.：とても単純なことです。ええ、きわめて明確な時期がありました。『テル・ケル』には完全な自律性があったのです……。まず、一つの出版社が二つの雑誌を創刊したことはとても変なことですよね。それも三つ目の雑誌を殺そうとしてですよ！ そういう操作をするのがスィユ社なのです。つまりジャン＝ピエール・フェイ Jean-Pierre Faye の『シャンジュ』があり、ジュネット、シクスー等の『ポエチック』があったのです。いいでしょう。我々はスィユ社の片隅にいました。しかし我々にはとても重要な二人の支持者がいる。なんとといってもコレクシオン・テル・ケルにおけるバルトです。バルトは最後まで素晴らしい友人でした。『ロラン・バルトの友情』⁷はご存知ですよ。彼の書簡がついていて、そんなに悪い本ではない。問題は深い友情に関することです。それからラカンです。それで我々はノー・タッチの存在となるわけです。「なんだって？ ソレルス？ 『テル・ケル』？ どうしたって？ うまくいかない？」（笑い）。ところが二人とも死んでしまうのです！

M.B.K.：確かにそうですね。私はそのことを考えもしなかったのですが、明白な事実そのものです。『女たち』のなかで説明されています。まるで盗まれた手紙のように……。

Ph.S.：二人とも死んでしまう。そこで私は状況が悪化するのをすぐに感じ取るのです。もう支持者はいない。何もなし。我々は四方を包囲された（笑い）塹壕のなかにいるわけです。そこです。親愛なるメディさん、まさにその時に、みんなが茫然とするなか、小型トラックを二百メートル走らせ、在庫の文

書をもって、我々はまずドゥノエル社で除染作業を行うわけです。ドゥノエルはガリマール・グループの傘下にあるのです。どうしてあんなことが可能だったのだろう？ おおおおお（笑い）。おおおお、なんて美しいんだ！（笑い）。

M.B.K.：一九七八年のだったと思いますが、『ニューヨークの啓示』という対談の本があります。そのなかであなたは「楽園」について多くを語っているのですが、ある意味であなたはすでに『女たち』のなかにいると感じられもするのです。少し誇張しているかもしれませんが……。

Ph.S.：そんなことはありません。もちろんです。あのですね、『女たち』は向こうから持ちかけられたものだったのです……。いいですか、当時の政治状況は次のようなものです。私の思い違いでなければ、一九八一年の五月に重大な出来事がありました。そのときパリ中が「勝ったぞ、勝ったぞ」と叫んでいました。それはミッテランの共和国大統領選挙のときだったのです。言うまでもないことですが私はその時自宅にいて、集中した状態の中にいました……。『女たち』の原稿が出来上がっていたのです。そのうちの半分はスィユ社によってすでに読まれていたのです。ところがフランソワ・ヴァール François Wahl という人は、その職務として……。

M.B.K.：（笑い）もう全部わかりました……。

Ph.S.：管理をするのです。もちろん！

M.B.K.：もし私が知っていたら……。

Ph.S.：管理です。面白いことだと言ってもいいかもしれませんが。しかしある日それがもう出来なくなる。それで、私はこれはうまくいかないだろうな、と感じるわけです。一方でみんながべらべらしゃべっているのは、ガリマールにフランソワーズ・ヴェルニ Françoise Verny が着任することについてです。

⁷ 二〇一五年にスィユ社から出されたソレルスのエッセイ。

出版業界すべては、こればかりはドゥポールの意味で、古典的な「スペクタクルの」世界です。しかし出版業界が何かを理解したことなど一度もないのです。それを証明するのは、もともと申し分のない平穩さのうちに我々がゲリラ戦を行い得たことです。問題は知ることであって……。これは秘匿の技術なのです、ねえ、あなた。その技術を知らなければなりません。

M.B.K : 自分が何をしているのか知らなければならない。

Ph.S. : 自分が何をしているのか、いかにそれを行っているのかを知らねばなりません……。それに、たまたま私はアントワヌ・ガリマールとある程度友人だったのです。というのは六十八年の夜、我々と一緒に処々々々をさまよったからです。催涙ガスのなかをですね。それで（笑い）、彼はまだ権力の座にいませんでした。しかし結局、彼はそこへたどり着きました。私はジェローム・ランドン Jérôme Lindon が何度も繰り返すことをずっと聞くはめになります。リュクサンブール公園を一回りしながら彼は私に言うのです、「アントワヌがその座に就くことは絶対ない。兄のクリスチアン Christian のほうだ」とね。ぼくはそう思わないと彼に答えました。私はアントワヌ・ガリマールに捧げた本を一冊書いているのですよ。『フォーリー・フランセーズ』というものです。ですから彼は友人なのです。それでアントワヌ・ガリマールの身に何が生じるのか？ 私の悪口がさかんに彼に言われるわけです。そうした折、彼はオフィスのあそこの窓辺に行き、そこにいた人物に⁸……というのも彼は「ソレルスなんて、下種野郎だ、人民が奴の息の根を止めるだろう！」という言葉を決えず聞かされているからなのですが、そこにいたその人物に、「ごらんになりましたか？ ゼラニウムを植え直させたのですよ」と言ったのです。

ですから「啓蒙専制主義」というのは、おそらくは敬虔な、しかし実際的な要望としてあるわけです。我々はいま、一世紀の時を経た場所⁹にいます。ここには亡霊がうようよいます。それらは言葉も交わさないでしょうし、挨拶もしないでしょう。なぜなら全員、互いに仲違いをしているからです（笑い）。サルトルとセリーヌ、ブルトンとアラゴン、などなど。お分かりに

なりますよね。そしてこれはガストン Gaston [・ガリマール] についての言葉です。「これほど多くの矛盾した人々を出版するなんて、あなたは一体どうやったのですか？」

M.B.K : 弁証法ですね。

Ph.S. : 『精神との契約』、あなたはそれをお読みになりましたね。いいでしょう。ところでこれはヘーゲルの絶対精神に似ています。

M.B.K : まったく興味を引かないわけではないもう一つ別のそして最後の徴候を取り上げます。『テル・ケル』は過去の作家たちを、いわば前衛そのものとしてまさに前面に押し出していました。ロートレアモン、マラルメ、ジョイス、バタイユ、アルトーなどです……。大雑把にあなたはおっしゃっています、「それ」が起こるのはここにおいてなのだ」と。これもまた、タブラ・ラサ（白紙還元）をむしろ基本的な姿勢とする前衛の考え方と比べますと、非常に新しいことでした。こんにちでも、あなたのおっしゃるような意味での現代アートの分野ではタブラ・ラサ的な姿勢がパロディーという様式で反復されています。このことについて笑うべきなのか泣くべきなのか分からないのですか……。

Ph.S. : ああ、確固たる信念を持つべきですよ。私は持っています。それも非常に強い信念です。

M.B.K : 『ランフィニ』とともに、あなたはそれでも文学批評の領野を著しく広げることになるでしょう。あなたは、おそらく『テル・ケル』時代にそれについて語ることなく読んでいたであろう作家、プルーストやセリーヌのような、あるいはまたフィッツジェラルドやヘミングウェイのような作家をみな擁護します……。あなたはずっと読んできた作家をみな擁護していますね。

Ph.S. : それもまたとても単純なことです。

⁸ この人物とはソレルス自身のことを指すと思われる。

⁹ ガリマール社内のソレルスのオフィスのこと。

M.B.K. : それでもやはり抑圧されたものの回帰といった側面がありますよね。

Ph.S. : もちろんです！ なぜならそれが戦いの主要な賭け金となるだろうと私は予想しているからです。というのも誰も本を読まないのですから。我々が数値とコミュニケーションに埋没するのを食い止めることはできません。従って我々がどこへ向かっているのかを知るのが私の興味を大いに引くのです。そこで私はバルトと共有していた考え（百科全書を、と彼は私に言いました、作り直す必要があるでしょう）をもう一度取り上げるわけです。当時彼は百科全書の図版についての本を出版したばかりです。見事な本です。百科全書を作り直す必要があるだろう。

そこで、私がそれをしたのです。

M.B.K. : そのことは我々を「メディアのソレルス」へと導きます。人々はそういうソレルスを大いに利用してきました（そしてそれを前衛の裏切りに結びつける人もいます……）。しかしながらすでにソレルスは、六十年代と七十年代でもまさに『テル・ケル』で充分メディア化されていたのですが（「知識人のテロリズム」等々で）、しかし、まあいいでしょう、「メディアのソレルス」という理由であなたにみんなが襲いかかるのは『女たち』と『ランフィニ』からです。私はずっと不思議に思っていたのですが、なぜこうした理由から襲われたのが「あなた」で、当時の他の有名なフランス人作家ではなかったのでしょうか？ あなたはこの点で多くの人々にとって一種の贖罪の山羊でした。しかし何の贖罪なのでしょう？

私の質問は以下の通りで、とても個人的なものです。まだ私が若かった頃、あなたのおかげで、私はテレビをつけ、パティユ、アルトー、ドゥボール等々をまさに発見したのです。年の割には早熟なことでしたが、それもあなたのおかげです。そのことがよきにつけ悪しきにつけ私という人間を形成しました。ですからあなたには文学におけるソクラテスの側面があります。「若者を墮落させる者」というわけです。質問はこうです。結局、『女たち』と『ランフィニ』によって開かれた時期のおかげで、あなたは反時代的な（笑い）そしてあなたなりの一種のシ

チュアシヨニストになったのではないのでしょうか？

Ph.S. : そうですね、つねにドゥボールの意味での「スペクタクル」は巨大な力を……恣にしています。こうした「スペクタクル」の「中で」生きていくには、あえて言いますが、とても、とても、特殊な神経システムが必要です。

一九八一年になるや否や私はすぐに理解したのです。完全に分かつた二つの面で行動する必要があることをですね。その二つの面は弁証法を理解できる観察者にとってはまったく必要なものだったのです。一方には大きな「生理的な」可能性があります。私はある種の状況で自分の身体を用いることができる。私はずっとそうしてきましたし、最後までそうし続けることでしょ。要するにですね、そう、あのう……「スペクタクル」産業にはいろいろな手段があります。ラジオ、テレビ、新聞、などですね。私はそれらすべてをやったのです。自分をそれほど無理強いすることなくですね、これは言うておかねばなりません。私は精力的にそれらをやってきました。それと同時に私は非常に早くから、いわゆる紙媒体の出版物が決定的な腐敗の坂をたどっていることを理解していました。私は『ル・モンド・デ・リーヴル』や『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』にあれやこれや書きました。しかしつねに他所で私ができることのために自分を抑えながらです。再度言いますが、問題は「時間」に働きかけることなのです。つまり完全に矛盾したさまざまな「時間」のなかで生きる術を心得ることです。もしそうすることができないと、一種の……に固定されてしまう。社会というのは、あなたを固定することができない、あなたをアイデンティファイできない、ということを怖れるものですから。

ですから私は先見の明があったのです。なぜなら私は完全に次のことを理解していたからです。出版も、文学批評も、いやはや、もはや存在しない。紙媒体の出版物も、ほとんど誰も本を読まないのですから、これも同じくもはや存在しない。というのもこれからはすべてがインターネットやタブレット等々で行われるのですからね。終わりです。

そうは言っても、私が徐々にその対象となった「左翼の」ブチ・ブルジョワ的出版業界からの乱暴な検閲のなかでは、私は生き残ることができなかったかもしれません。もし私が、必要な折に、メディアで人形芝居を演じに行かなかったとしたら、

私は生き残れなかったかもしれないのです。ここでも私はそれを演じたばかり、というより再演したばかりです。本当ですよ。そして私は次の点をとても気に入っている。私は文学批評無しで済ますことができるのです。いくつかの番組があるのです。ヤン・バルテス Yann Barthès とか、「私たちは寝ていない」¹⁰ や、ラジオ……。私は何でもやっているのです。何の重要性もありませんよ。まあ少しくたびれますが、この通り、私は帰ってきて、眠って、それから起き、書きかけだったパラグラフの続きを書くのです。

これが私の生活です。

M.B.K. : いいでしょう。最後の質問の出番です。これはあなたの最新の本からの抜粋ですが、前衛の例の消滅についての見事な文章です。最終的にあなたは、おそらく前衛の終わりのある種の前衛となっているのでしょから、フィリップ・ソレルスを歴史的にそのようなものとして定義することが可能です。ある意味、人があなたに支払わせている代償はそういうことです。あなたは前衛の墓掘り人夫だったという非難も少しあります（私は『TXT』『一般文学評論』といった雑誌のことを考えています……）。いずれにせよ私はあなたを引用します。というのも私にとってこれは過去に起こったことに関する範例的な考察だからです。「しかしながら低いもの音をたてながら前進する、しかもそれはフロイトによっても告げられていた発見とは、これからは過去は未来でもあるということだ。歴史家や学校によって教えられる線状の過去ではない。爆発的な過去だ。ぼくたちはその DNA をようやく解読し始めたばかりだ。二十一世紀は、遺伝子の偏在する現在、それだけでもうすでに厳しい解毒「治療」となっている。それは先史時代からこんにちまでに過ぎ去った諸世紀のあらゆる独自性を浮き彫りにするだろう。どれほどの驚きがわれわれを待っていることか！ なんと素晴らしい新たな百科全書！¹¹」

Ph.S. : はい。その通りです。それは「選別」です。我々は選

別の時代にいます。「新しい時は少なくとも厳しい。」¹²選別です。ですから……。誰だったかもう分からないのですが……そう「墓掘り人夫」です。彼が言っていたようにですね、墓掘り人夫が存在するためには、死体がなければならぬわけです。

M.B.K. : 結構です。それが最後の言葉となると思います。

Ph.S. : 「前衛の墓掘り人夫」であることを私は認めます。あなたは『ハムレット』のなかの墓掘り人夫たちの対話を覚えていますか？

M.B.K. : いいえ。

Ph.S. : とても美しい。非常に美しいものです。「これはこの世で一番古い職業だ」と彼らの一人が言います。「これはアダムの職業だったんだ」（笑い）。

フィリップ・ソレルス
メディ・ベラージ・カセムとの対談

おわりに

メディ・ベラージ・カセムとフィリップ・ソレルスとの対話
はうまく噛み合っていない（というよりソレルスがうまくかわしている？）ようにも見えるが、カセムの質問そのものは事の本質をつく鋭いものだ。

この対談の内容をまとめてみる。まず、『テル・ケル』は当初 N.R.F. に範をとった古典的スタイルの雑誌として始まった。しかしソレルスは最初からニーチェ、ハイデガーに関する関心は示している。ソレルスが前衛へ舵をきったのは小説『ドラマ』（一九六五年）あたりからで、それに応じて『テル・ケル』も前衛化してゆく。『テル・ケル』の前衛性とは、文学について哲学者はどのように思索するのか（たとえばハイデガーがヘルダーリンを思索する場合）ということから成り立っていた。哲学者の多くは大学の研究者であり、その結果、前衛雑誌としては

¹⁰ *On n'est pas couchés* というテレビ番組。

¹¹ ソレルスの小説『中心』からの引用。Philippe Sollers, *Centre*, Editions Gallimard, 2018, p.90.

¹² ランボアの『地獄の季節』における「別れ」からの引用。

異例なこととして、大学の研究者たち、たとえばフーコー、バルト、デリダなどの寄稿が多く掲載された。前衛という概念はレーニンからきており、六十年代七十年代の前衛は、旧ソビエト共産党が発する時間の観念を共有していた。当時の左翼的な大学の研究者の多くはこのような時間の観念を有しており、『テル・ケル』は一時期このような大学の研究者たちのわが家のような状態になる。ソレルスは一九七一年にジョイス問題（これが具体的にどんなものだったのか筆者は詳らかにしない）で大学の研究者たちと決別し、毛沢東主義へ転じる。しかしソレルスに関心を抱いたのは中国における毛沢東主義であり、やがて毛沢東主義とも縁を切る。その後ソレルスは、ジェームズ・ジョイス、フェルディナン・セリーヌらの文学的前衛性を追求しながら、『楽園』（一九八一年）という句読点の一切ないモノローグの大河を発表する。『楽園』はソレルスの最後の前衛小説であり、『女たち』（一九八五年）以降彼は古典的な小説のスタイルに戻ってゆく。

『テル・ケル』の支持者であったロラン・バルトは一九八〇年に亡くなり、同じく支持者であったジャック・ラカンも一九八一年に亡くなる。二人の支持者を失った『テル・ケル』は孤立無援の状態となり、ソレルスは周囲の状況の悪化にさらされる。前衛の裏切者、下種野郎といった罵詈雑言がソレルスに浴びせられるなか、『テル・ケル』はスィコ社を抜け出し、ドゥノエル社に逃げ込む。『テル・ケル』は廃刊となるが、たまたまガリマール社の社長のアントワヌとソレルスが旧知の間柄だったので、ソレルスはガリマール社に合流し、アントワヌの「啓蒙専制主義」のおかげで『ランフィニ』という雑誌をスタートさせる（一九八三年）。その後のソレルスは、新たな百科全書を作成するために様々なものを書いている、というわけである。

前衛を解体させたのは旧ソビエトの共産党が発する時間の考え方に由来する、とソレルスは述べているが、おそらくこのような時間の考え方とは実際には唯物史観を指すものと思われる。唯物史観とは、周知のように、マルクスの『資本論』第一巻第二十四章「いわゆる本源的蓄積」第七節の文言に基礎を置くものだ。「資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した

生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの社会的な外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される¹³。……。資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を産み出す。それは否定の否定である。」つまり、生産手段と生産様式の発展は、従来の生産関係を内側から解体してゆく、とマルクスは理論的に述べている。だが急に彼は具体的に、それは「資本主義的所有から社会的な所有への転化」として現れると予言した。生産手段と生産様式の進歩が旧来の社会的な生産関係を解体してゆくというのはマルクスの言う通りだと思われるが、しかし実際に起こったことは資本主義的所有の弔鐘が鳴ったのではなく、グローバルなハイパー資本主義的所有への転化であったことは現在の我々が目撃している。だが当時の前衛はこのような唯物史観的な時間の図式をおおむね信じていたのだろう。しかしどうやらソレルスは違ったようだ。彼は、ヘーゲル弁証法の足を地にかせると主張するマルクスの誤りを指摘している。彼はむしろハイデガーの存在論的時間の方に共感を寄せている。「時間の根源的なありかたは、時間性の時熟であって、時間にかかるものとして、関心の構造の構成を可能にする。時間性は本質的に、脱自的である。時間性は、根源的には将来から時熟する。……。将来は既往性より以後にあるのではなく、既往性は現在より以前にあるのではない。時間性は、既往的＝現時的将来として時熟するのである¹⁴。」唯物史観の時間にたいする考え方は直線的で目的論的と言えるだろうが、ハイデガーの時間にたいする考え方はこれとは異なり、時間はそもそも脱自的であって、過去・現在・未来は本来的な時間性においていわば四次元的に時熟するのである。

それにしても「前衛とはダンテなのです」とソレルスに唐突に言われても、それがどういうことなのか即座には了解しがたいものがある。筆者なりにこれを解きほぐしてみようと思う。まず、現世における現実、社会、これらを地獄的であると認識すること。いまのままの現実ではよろしくない、これは批判すべき対象である。前衛を駆動させる前提にはこのような認識が

¹³ カール・マルクス『資本論』（三）、向坂逸郎訳、岩波文庫、一九六九年、pp.415-416。

¹⁴ マルティン・ハイデガー『存在と時間』下、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫（一九六四年）、pp.223-260。

まずある。それではそのあとどうすればよいのか。よりよき社会、よりよき未来を目指して現実の社会に働きかける。これが唯物史観に立った側の姿勢だろう。しかしソレルスは違う。『神曲』におけるダンテはヴェルギリウスを導き手として持っている。ヴェルギリウスは古代ローマの大詩人だ。ソレルスはおのれの導き手として過去の作家、詩人、哲学者を持つ。サド、ロートレアモン、ハイデガーたちだ。彼はそれらの作家や詩人や哲学者を論じたり擁護したり引用をたびたびする。過去の文人たちがソレルスのヴェルギリウスとなるわけだ。それではソレルスはどんな楽園を求めるのか。ダンテと同じく彼は現実の社会における楽園の実現を夢見ることはしない。ランボーについて語っている対談の中でソレルスはこう述べている。「楽園、それは、理性、ダンス、音楽、恍惚的な旋回となった幻覚のことです¹⁵。」ソレルスにおける楽園は、まさに彼自身の小説『楽園』において、エクリチュールの冒険として追及される。そしてそこで前提されている時間性は、ハイデガー的な脱自的時熟だと思われる。ダンテのような超越的な神を設定することはしない（ソレルスはニーチェの「神は死んだ」を受け入れている）のではあるが、しかしソレルスは、地獄・煉獄から楽園へというダンテ的な図式を前衛のプログラムに組み込んでいる。そしてソレルスにおいてハイデガー的な脱自的時熟とダンテ的な楽園が一体となる。このような構図をソレルスは、ランボーにおける『地獄の季節』から『イリュミナシオン』への展開、ロートレアモンにおける『マルドロールの歌』から『ポエジ』への展開のなかにも見て取っている。

とはいえソレルスは前衛化した当初から、唯物史観的な時間とハイデガー的な本来の時間性を判然と区別していたわけでもないだろう。彼とても唯物史観的な時間の観念を前衛の同志たちと共有していた期間はあったはずだ。夢と現実の二律背反を打ち破ることを企てるシュルレアリスム革命を唱えたアンドレ・ブルトンでさえ、ソビエト主導の革命的な社会活動に一時期同意を示していた時代があった。「世界を変革すること、とマ

ルクスは言いました。人生を変えること、とランボーは言いました。これら二つのスローガンは私たちにとって一つになるのです¹⁶」とブルトンは一九三五年に発言している。社会変革と芸術における革命は一つにならなければならないとブルトンも信じていたのだ。おそらくソレルスが唯物史観的な時間を放棄するのはこの対談から推測すると一九七〇年代初頭である（だから彼は前衛の仲間から「裏切り者」と呼ばれるようになる）。

しかしそのブルトンですら、社会的な変革路線が求める芸術は正統的で古典派的なものであり（社会主義リアリズム）、打破すべきブルジョワ階級や王党派右翼の方がむしろピカソやシュルレアリスムを評価している、というジレンマを同じ一九三五年に表明している¹⁷。革命的な前衛はブルトンの時代からすでに、行動における前衛と表現における前衛に分裂していたようだ。同様のことがソレルスとギー・ドゥボールのあいだで反復されている。『テル・ケル』は表現における前衛であり、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』は行動における前衛と言えるだろう。『テル・ケル』は『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』のようなゲリラ活動は行わなかったが、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』のテキストを書くドゥボールの文体は超・古典的なのであった。

だからといってシチュアシオニズムが単なる行動主義であったわけでもない。シチュアシオニストたちは、漂流、転用、落書き、心理学的地理、映像、といった手法を用いて状況に働きかけ、状況を構築しようとした¹⁸。これらの手法が社会的に容認された旧弊で古典的な手法であったとは全く言えない。きわめて前衛的なものである。なかでもソレルスがドゥボールの傑作として称賛してやまないのは『われわれは夜に彷徨い歩こう、そしてすべてが火で焼き尽くされんことを』という映像である。ソレルス自身おそらくドゥボールに触発されて『女たち』以降もさまざまな映像に取り組んでいる。ソレルスはこの対談以外の最近の対談や小説のなかでもたびたびドゥボールに言及しており、彼がいかにかドゥボールに関心を寄せているかを窺わせて

¹⁵ 《Une saison en enfer》: Aller - Retour, *L'Infini* n°122, Printemps 2013, pp.3-25.

¹⁶ アンドレ・ブルトン「作家会議における報告」、『ブルトン集成 五』、人文書院（一九七〇年）、p.215.

¹⁷ アンドレ・ブルトン「今日の芸術の政治的位置」、『ブルトン集成 五』、p.164.

¹⁸ ギ・ドゥボール『スペクタクルの社会』（一九六七年）、木下誠訳、平凡社、一九九三年を参照せよ。

いたのだが、この対談で初めて彼はドゥボールが好きだったことが証言されている。

前衛と大学との関係、あるいは具体的な固有名詞と結びついたソレルスの（スキャンダラスな？）発言については、筆者には手に負えないことなどで対談のままにしておきたい。

唯物史観に支えられた前衛の死、シチュアシオニスト・ドゥボールのオーヴェルニューでの孤独な自死、表現における前衛『テル・ケル』の消滅、などを見届けたソレルスは、前衛の墓掘り人夫を自任する。前衛の死を生き延びた現在の彼は新たな百科全書の作成にいそしんでいる。

アヴァンギャルド
前衛の死

小山 尚之*

(* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

本稿は二〇一九年春号の『ランフィニ』誌第一四四号に掲載された「前衛の死：メディ・ベラージ・カセムとフィリップ・ソレルスとの対談」を翻訳しそれにコメントを付したものである。この対談でソレルスは『テル・ケル』の前衛性、他の前衛との違い、ギー・ドゥボールと『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』との関係、『テル・ケル』から『ランフィニ』への移行などについて証言している。

キーワード： フィリップ・ソレルス、前衛、『テル・ケル』、ギー・ドゥボール、『ランフィニ』